与謝蕪村

俳句シリーズ

人と作品

大礒義雄著

与謝蕪村

大礒義雄著

俳句シリーズ 人と作品

俳句シリーズ　与謝蕪村　人と作品　2

昭和四十一年七月五日初版発行
昭和四十四年二月五日重版発行

定価　六八〇円

著者　大礒義雄
発行者　及川篤二
印刷者　共信社印刷所

発行所　株式会社　桜楓社
101東京都千代田区神田猿楽町二の五
電話（二九一）五六六〇～二
振替　東京　一八〇二〇

まえがき

本書において私は蕪村像のデッサンを試み、客観的な正確さを心がけた。その結果考証のくどさと叙述の平板さとに陥ったようであるが、なお考証を省いたため意を尽くさない所もないわけではない。又、蕪村自身の言葉に最も愛着を覚えるが故に、蕪村の句・文・書簡など出来るだけ載せたので、読みづらい点があるかも知れない。

作家研究篇は初めは枚数に関係なく気楽に書いてみた。出来上ったものは本書の二倍余の分量であった。それを短縮するのが意外に苦労で、漸く本書のようにまとめたのである。が、どうも各部分の釣合が適当ではないようである。一体に前半には大鉈を揮い、後半は軽く撫でた形である。しかし考えようによっては蕪村の蕪村たる所以は後半に重みがかかるので、あるいはこれはこのままでよいのかも知れない。

本書は蕪村の著作や基本的な文献資料に即して、私自身のイメージを大事にしたので、先学の研究成果はあまり参照しなかった。又、先学の学説において、その初発を究めることが困難な場合が多かったので、出典は記さないことにした。いささか学問的でないやり方で気になるが、ご了承をえたいと思う。本書はあくまでもデッサンのつもりであるから、読者諸賢において適当に肉付けし、色彩を加えて華麗にしていただきたい。夜半翁もそれを望むであろうし、俳句も由来象徴詩として読者に委ねる部分が少なくない。

特に学恩を蒙った書は、穎原退蔵氏著『改訂増補蕪村全集』、同編著『蕪村全集』第一巻・第二巻、同校註・清水孝之氏増補『與謝蕪村集』であり、殊に『與謝蕪村集』の年譜は、これに拠って叙述を進めた点において、多大の恩恵を受けたことを特筆して感謝したい。先学の論文もあまり参照しなかったとは言え、乾猷平氏・河東碧梧桐氏等のものを、やはりちょいちょいは見ているので、一々お名前は挙げないけれども感謝の気持に変わりはない。

終りに蕪村の画の紹介をゆるされた清水孝之・神谷義郎両氏に厚くお礼申上げたく、その他私を励まして下さった辱知諸氏や桜楓社の方々にも心から感謝の意を表したいと思う。

なお、紀行篇は省略させてもらい、その分を作家研究篇の充実に当てた。

昭和四十一年五月二十六日

大　礒　義　雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

まえがき

作家研究篇

一、誕生と幼少時代……九
時代 九　故園毛馬 九　父母 一三
二、江戸居住……一六
東下と師承 一六　江戸俳壇の概況 一七　巴人宋阿 一八
三、関東遊歴と奥羽の旅……二〇
関東遊歴 二〇　奥羽行脚 二一　諸家との交流 二三
四、京に移住……二五
上洛 二五　『古今短冊集』『夜半亭発句帖』 二五　京俳壇の概況 二七
五、宮津滞在……二八
丹後の宮津 二八　八幡観百川 二九
六、京生活と讃岐の旅……三一
京生活 三一　画風の確立 三三　宋屋の死と俳諧への意欲 三三　讃岐の旅 三四　帰洛後の活躍 三六　『夏より』の蕪村の句 三九

七、夜半亭継承と活躍……四二
夜半亭継承　四二　『明和辛卯春』　四五　高徳院発句会と太祇　四七
召波と離俗論　四九　『其雪影』　五三　『あけ烏』　五四　『このほとり』・『也哉抄』　五六　樗良・几董との三吟　五八　暁台の蕪村初訪問　五九　『昔を今』・『芭蕉翁付合集』・『たまも集』など　五九
八、円熟……六二
「洛東芭蕉菴再興記」　六二　俳諧物の草画　六七　『月の夜』　六七
娘の結婚　六八　『続明烏』　六九　『夜半楽』　七二　「春風馬堤曲」
七五　「澱河歌」　七七　『新花摘』　七九　娘の離縁　八七　儋叟の祖
翁碑文　八八　春の旅　九〇　芭蕉の紀行図巻　九五　大魯　九五　連句への姿勢　九六　「蘆陰句選序」　九九　また談林会のこと　一〇〇　『もゝすもゝ』　一〇三　蕪村連句の鑑賞、冬木立の巻　一〇八　蕪村の古典趣味　一一六　蕪村の対暁台意識　一一九　「十番左右合」　一二〇　其角の句稿切　一二一　吉野行　一二三　『花鳥篇』　一二三　「俳諧正名序」

九、終焉……一三〇
正月の画俳　一三〇　芭蕉百回忌取越法要　一三二　太祇十三回忌　一三三
宇治田原行　一三四　死病　一三七　『五車反古』　一三八　終焉　一四二　辞
世の心　一四七　余香　一四八
鑑賞篇……一五一
選句抄……二五三
参考文献……二六七
年譜……二七一
俳句索引……二八五

作家研究篇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一、誕生と幼少時代

時代　蕪村は江戸中期の人である。享保元年、西暦一七一六年に生まれた。その月日はわからない。享保元年は芭蕉世を去って二十二年目、直門の人々も、蕪村の私淑した其角去って九年、それほど遠い昔ではなく、なお多くの人々が健在であった。

俳諧年表を繰ってみると、凉蒐享保二年、北枝同三年、桃隣同四年、尚白同七年、千那・正秀同八年、木因同十年、園女同十一年、土芳同十五年、支考同十六年、杉風同十七年、祇空同十八年、洒堂元文二年、路通同三年、乙由同四年、野坡同五年、野水・露川寛保三年に死去というように、蕪村の幼少時代のみならず、青年時代にいたるまで生存を続けていた。その点から見れば、蕪村はそれほど芭蕉に遠い人ではなかった。なお蕪村の尊敬した鬼貫も元文三年、蕪村二十三歳の時まで生きていたのである。

故園毛馬　誕生の地はたぶん摂津国東成郡毛馬村、現在の大阪市都島区毛馬町の地である。それについても二三の説があり、あるいは丹後の与謝郡といい、あるいは摂津の天王寺村という。蕪村の友人、大阪の大江丸は、その著『はいかい袋』に、

蕪村　姓は与謝氏、生国摂津東成郡毛馬村の産、谷氏也。

といい、その下に小書で、

丹後の与左の人といひ、又天王寺の人といふも、別に村が所謂ありといへり。

と異説を伝えている。蕪村死去後十九年目に発行された書である。

蕪村に親炙した几董は「夜半翁終焉記」に、「浪速江ちかきあたりに生たちて」と記したが、蕪村自身語るところが、この場合もっとも信頼がおけよう。名作「春風馬堤曲」に添えた手紙に、

一　春風馬堤曲　馬堤は毛馬塘也　則余が故郷也

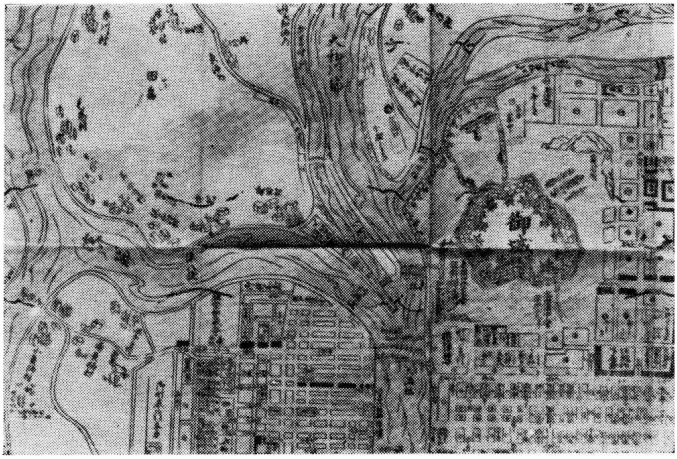
余幼童の時、春色清和の日には、必友どちと此堤上にのぼりて遊び候、

と述べているので、生まれた土地とまでは言えないとしても、毛馬が故郷であることは決定的であろう。

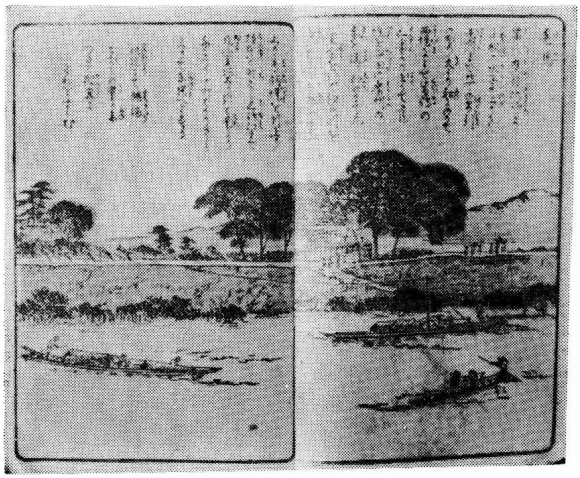
天王寺村とするのは、蕪村の俳号を有名な天王寺蕪に因んだ命名と解した結果であると思われる。与謝郡説は、母が与謝郡の人という伝えや、蕪村が与謝氏を称したところから、生じたのであろう。

さて蕪村の故郷とする毛馬村とは、どのような所であろうか。京都盆地を出て緩やかに大阪平野を流れる淀川が、大阪に近づき、大阪城を真南に望んで、それに向かうかのごとく流れを大きく南に変えて、市街地に入る。その湾曲部あたりが毛馬の地である。そして、そこから中津川(長柄川)が分かれている。今では中津川は改修されて新淀川となり、毛馬閘門が出来て、大阪に入る水をここで調節している。

毛馬村から大阪市中へ出るには、北長柄村へ渡る毛馬渡口があった。時代は下るが文久元年刊の『淀川両岸一覧』には、この渡しについて、「東生郡毛馬村より西成郡北長柄村へ淀川をわたす舟わ



摂津大坂大絵図　左上毛馬村　元文四年刊



毛馬堤の図　松川半山画（文久三年刊の「淀川両岸一覧」所載）

たし也、渡の長サ百九十間と云、此所に煮売舟ありて、枚方に同じ」と書いてある。枚方はこの上流にあって「くらわんか船」で知られるようににぎわった港であるが、ここ毛馬渡も相当ににぎわったらしい。

「春風馬堤曲」に、

○やぶ入や浪花を出て長柄川
○春風や堤長うして家遠し
○堤下摘ニ芳草一　荆与レ蕀塞レ路
荆蕀何妬情　裂レ裙且傷レ股
○渓流石点々　踏レ石撮ニ香芹一
多謝水上石　教レ儂不レ沾レ裙
○一軒の茶見世の柳老にけり

とある。

これを見ると、ここに登場する「浪花橋辺財主の家」に奉公する「容姿嬋娟」たる娘は、大阪の町を北に上って南長柄村を経、北長柄村に出てしばらく長柄川沿いの堤を歩いてから、毛馬の渡口を渡って毛馬堤に上り、その堤上を北へ向かい、故郷の家をめざして歩いていった、と見られる。幼少時代の蕪村もこの通路をしばしば往復したことであろう。

さきの手紙の続きに「水ニは上下の船アリ、堤ニハ往来ノ客アリ」とあって、毛馬堤は子供達の絶好の遊び場であった。見晴らしがよく、川の眺めはまことに広広として、そこには上下する三十石船

などがあり、いつまで見ていても、見飽きることはない。遙か彼方に目を放てば、六甲の山々であろう、山脈が低く連らなり、それに続いて箕面の山も眺められた。一方、大阪城も秀でて見えた。春には堤に柳の緑がなびき、たんぽぽが咲き連らなり、初夏になれば野茨の白い花も、一面に芳香を放っていたことであろう。堤を往来するさまざまな人の姿も目を楽しませた。

毛馬村は百戸ばかりの豊かな農村であったという。蕪村の句に「蜻蛉や村なつかしき壁の色」というのがあるが、幼い頃蜻蛉と遊んだ毛馬村の農家の白壁を思い出して作ったのかもしれない。毛馬村はまた胡瓜など瓜類のよく出来る土地柄という。

蕪村が毛馬を故郷と言わず、故園と呼んだことにも、特殊のニュアンスがあるのではあるまいか。ふるさとには違いないが、故園は郷里・郷国・故里・故国・故山などとは相違して、田園的情緒を含む語として、蕪村は用いているのではあるまいか。毛馬はまさに蕪村の故園なのであった。

私が毛馬に想像をたくましくしたのは、かように広広としてのどかな故園の風物が、蕪村の性情を養うところが大きく、その詩心を育て、その絵画・俳諧の基底の一部を形成していたと見るからに他ならない。

父母

蕪村の両親については、ほとんど知るところがない。几董は「夜半翁終焉記」に、はじめ「村長の家に生ひ出(いで)て」と書き、次に「村長」を「郷民」と改め、最後に「郷民」をも削ってしまった。蕪村自身、自己の出生に関して語ったものがない。語りたがらなかったのであろう。母が与謝郡の人というその地の口碑や、後年蕪村が与謝に行って四年も滞在したことや、谷口姓を改めて与謝姓にしたことなどから考えると、次のような推測が出来ないことはない。

与謝地方はあまり豊かでないから、京や大阪へ出稼ぎする男女が多かった。蕪村の母もそういう人で、大阪近郊毛馬村の富農で村長か何かであった人のもとに、下婢として働くうちに、主人の子をみごもるようになった。それが後年の蕪村で、嫡出の男子がいないために、庶子ながら家督を継ぐべく育てられた。両親は早く死去して家督は継いだが、子供の頃から画など好きで実生活にはうとく、そのうえ当時大阪の商業資本が、大阪近郊の農地を買いあさるのに負けて、遂に家を手離さなければならなくなった。そうした場合、落ちぶれて住むには大阪はあまりに近い所であり、京も住みうく、思い切って当時よくある先例に従って江戸に下った。

右は推測にすぎないけれども、いくぶんかの真実は含まれよう。『新花摘』執筆の動機が亡母追善と考えられ、それを五十回忌と見れば、母の死去は享保十三年、蕪村十三歳の折りとなる。蕪村より少し後輩の大阪の雑学者田宮橘庵の『嗚呼矣草』（文化三年刊）に、「蕪村は父祖の家産を破敗し」というが、家産倒尽とか江戸への出奔なども、まず父を失い、多感な少年時代に母を失った悲しみに無関係だとは思われない。

亡母に対する思慕の情は、「春風馬堤曲」の中に、悲しいほどによく出ている。

○憐みとる蒲公茎短して乳を浥

○むかし〳〵しきりにおもふ慈母の恩

慈母の愛袍別に春あり

……

○矯首はじめて見る故園の家黄昏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.